

特別報告2 ～東日本大震災・被災地難病患者を支援して～

被災地医療を後方支援

NPO 法人 難病ネットワークとやま 理事長
中川みさこ(なかがわみさこ)

2011年(平成23年)4月17日 日曜日

社会 (28)

北 日 本 新 聞

被災地医療を後方支援

難病ネットワークとやまなどの患者団体から届いた支援物資に感謝する東北大学の青木医師―仙台市



東北大神経内科の青木正志医師から同法人に届いたメールによると、石巻地域では物流が滞り、医療品は何とか確保できているものの、食料不足は依然として改善されていないという。「医療者に配る食料を送ってほしい」と協力を求められ、同法人は今年12日に野菜ジュース180本とサバの缶詰230缶などを発送した。

富山の難病患者団体

富山の難病患者団体からも協力をしたいという申し出があり、同法人が窓口となって必要な物資を送ることにした。中川理事長は「医療者はかなり疲れていると聞いている。被災地で足りない物を送ることで役に立ってほしい」と話している。物資の買い出しや発送作業のボランティア、支援金も募っている。問い合わせは中川理事長、携帯電話090(43228)6994。

食料など発送 他県とも連携

難病の患者や家族でつくるNPO法人難病ネットワークとやま(富山市清水町、中川みさこ理事長)は、被災した宮城県石巻市の病院に派遣されている東北大(仙台市)や現地の医療者を支援するため、食料などの救援物資を送っている。被災地では十分な食事を取れないまま、医師らが日夜、懸命な医療活動を展開している。今後は他県の患者団体と連携しながら物資を送る予定で、協力してくれるボランティアを募集している。(社会部・中田真紀)

2011年(平成23年)6月19日 日曜日 社会 (32)



おむつバンクのチラシを手に協力を呼び掛ける中川理事長―富山市月岡西緑町

難病ネットワークとやまは、波の郷クリニックから、震災後、食料不足に悩む被災地に残っている患者におむつを送ってきた。支援を続ける中、南三陸町の在宅患者を支援している同県大崎市の一穂で外出が難しく、おむつや尿

難病ネットワークとやま

介護用おむつ提供を 南三陸(宮)の在宅患者支援

被災した宮城県南三陸町の寝たきり患者を支援しようと、難病患者や家族でつくる難病ネットワークとやま(富山市清水町、中川みさこ理事長)は、被災地におむつを送る「おむつバンク」を設立した。県内の会員らの自宅を支店としておむつを集め、患者に届ける仕組み。津波を免れた在宅患者の中には介護用おむつが手に入らず苦慮している人も多く、中川理事長は「未使用であれば、開封してあっても構わない。協力してほしい」と呼び掛けている。(社会部・中田真紀)

取りハットを1日1回替えることもままならない。訪問看護ステーションのスタッフが自ら被災しながらも、津波被害を受けなかった数少ない車で患者宅へおむつを届けている。水道の復旧も進まず、衣服やシーツの洗濯すらできないという。こうした状況を聞いた中川理事長らは、南三陸町の訪問看護ステーションに宅配で届けよう、おむつバンクの設立を決めた。富山市月岡西緑町の理事長宅を本部、富山、高岡、魚津、砺波の会員宅など計8カ所を支店とし、今月上旬から送り始めた。おむつと尿取りパッドに加え、大人用尿ふきや消費用エタノール、カット綿なども募る。

同クリニックのソーシャルワーカー、大石春美さんはおむつを替えないだけでなく、在宅患者は「家があるでしょ」という周囲の冷ややかな目もあり、心が折れそうになっている。遠方からの温かい支援は大変ありがたいと話す。

問い合わせは中川理事長、電話090(43228)6994。活動を紹介したブログのアドレスは<http://nanetoyama.jugem.jp/>

県内各地から集まったおむつ。トラックに
積み込まれ被災地に運ばれた一宮山市森住町



介護おむつ南三陸へ

難病ネット ワークとやま 県内の善意送る

東日本大震災で被災した宮城
県南三陸町の寝たきり患者
を支援するため介護用おむつ
を送っている難病ネットワー
クとやま(富山市清水町、中
川みさこ理事長)の元に、県
内各地から続々とおむつが寄
せられている。25日には、約
250袋のおむつなどを載せ
たトラックが被災地に向けて
出発した。

難病ネットワークとやまは
今月上旬、おむつを集めて被
災地に送る「おむつバンク」
を設立。富山市月岡西緑町の
中川理事長宅を「本部」、会
員宅などを「支店」として、
おむつの回収に取り組んでい
る。19日の本紙で活動を紹介
したところ、在宅介護をして

いた高齢者や主婦から「家に
あるおむつを使ってほしい」
と100件近くの申し出があ
り、おむつや尿取りパッド、
紙パンツなどが届けられた。
25日は、被災した宮城県石
巻市を支援しているNGO
「アジア子どもの夢」(富山市

中川さんは「予想以上に多
くの人から協力をいただき感
謝している。息の長い支援を
続けたい」と話している。お
むつバンクの活動は今後も継
続し、7月にも「アジア子ど
もの夢」のトラックで現地に
届けることになっている。

「支店」は現在、滑川、朝
日、舟橋を除く12市町の会員
宅やアイサービス施設など計
21カ所。問い合わせは中川理
事長の携帯電話090(43
208)6994。

介護の不安軽くしたい



地元の寺から介護用オムツの
入った段ボール箱を選び出す
中川みさこさん(富山市内)

不要になった介護用オムツを回収し、宮城県南三陸町に送り
続けている団体が富山市内にある。名付けて「オムツバンク」。
被災地で介護の負担を抱える人々の支えになっている。

難病患者を支援するNPO
法人「難病ネットワー
クとやま」(中川みさこ代表
40)は月末が近くなると、
自ら運転するワゴン車で地
元の寺や民家を回る。近所
から寄付されたオムツを目
いっぱい車に積み込み、事
務所まで運ぶ。

オムツバンクを始めたの
は今年6月。「被災地には
オムツが手に入りづらい人
がいる」と、知り合いの医
療ソーシャルワーカーから
聞いたのがきっかけ。中
川さん自身、パーキンソン
病とがんを患う実父の介護
をしており、介護する側、
される側の窮状をすぐに想
像できた。

ツイッターなどを通じて
オムツの寄付を呼びかけた
ところ、老衰や認知症、難
病の家族をみどり、しまっ
たまの「たんすオムツ」
を提供してくれる人が相次
いだ。集めたオムツは、被
災地への物資支援をしてい
る別のグループに頼んでト

富山のNPO オムツ回収、南三陸へ



トラック輸送。南三陸町の
「りあす訪問看護ステーション」
を通して現地の約50
世帯に手渡す。毎月2、3
日を送っている。

同ステーションの訪問看護
師阿部美智枝さん(47)に
よると、現地では多くの薬
局が震災でなくなり、往復
2、3時間かかればオムツ
を買えなくなった人も
いるという。介護している
家族が、オムツの心配がな
くなって助かると、中川さん
と阿部さん。中川さんの夢は
膨らむ。富山以外の別の地
域でも同じような活動をし
てくれる人がいたら、もっ
と多くの人の助けになると
思う。問い合わせは中川
さん(090・43208・
6994)へ。(久永隆一)